

豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会に参画する子どもの育成  
—『タニンゴト』を『ジブンゴト』としてとらえる実践を通して—

- 1 研究の目的
- 2 研究の価値・意義
- 3 研究の全体構想
- 4 研究の仮説と方法
- 5 実践
- 6 実証・考察

第24分科会  
総合学習と防災・減災教育  
A-2ものづくり・生活の中から

大島 俊介 (海部・(津島)東小)

## 研究の概要報告

### 一、全体の感想

SDGs や環境、防災、福祉など今日的な課題を扱った実践、地域とのかかわり、地域への愛着を深める実践、自己の生き方を見つめ直し、社会的・職業的自立にむけた力を育む実践などが報告された。総合学習を核として学校や地域の特色をいかした教育課程を編成したり、目の前の児童生徒に即した教育活動を創意工夫したりする実践者の真摯な姿勢が表出されていた。

### 二、討論の内容

(1) 他人事ではなく、自分事として主体的に探究したいという課題を見つけ出すための工夫

SDGs や環境、防災、福祉といったテーマに関して、児童生徒が課題の解決にとりくむ実践が報告された。討論では、児童生徒がこれらの探究課題を自分事としてとらえられるようにするための探究課題との出会わせ方について話し合われた。助言者からは、継続的に地域の人々とかかわり、人々の思いや願いにふれることのできる学習展開とすること、自分自身や身近な人々について見つめ直す機会を設定すること、失敗や挫折をする場面も積極的に取り入れること等が重要であるとの助言を得た。

(2) 新たな価値観や課題の獲得にむけた、効果的な地域や家庭との連携のあり方

地域学習、食育、情報モラル教育、キャリア教育等、地域への愛着を深める実践、自己の生き方を見つめ直し、社会的・職業的自立にむけた力を育む実践が報告された。討論では、地域の人々との継続的な関係性の構築の方法や、地域や家庭の協力を得るための方法など、地域や家庭と連携し新たな価値観や課題を獲得できるようにするために必要な手だてについて話し合われた。助言者からは、教員自身が地域の人々と積極的にのかかわり、つながりを築くこと、そして、児童生徒が地域の人にかかわる際に、教員が事前に調整や準備をしすぎず、児童生徒が困ったり迷ったりする場面を意図的に作り出すことが効果的であるとの助言を得た。

(3) 総括討論

総合学習における持続可能な学びを実現するための授業づくりのあり方について、各実践をまとめながら討論を深めた。実践者からは、児童生徒の気付きを促すために課題への出会わせ方を工夫すること、児童生徒が困ったと感じられる場面を設定すること、教員同士の情報共有や連携を促進すること等に関する具体的な手だてについて数多くの意見が出された。助言者からは、オープンエンド型の授業づくりを意識することや、前年度の総合学習のとりくみや成果について教員が児童生徒と共有していくことが重要であるとの助言を得た。

(加藤智・廣瀬浩司)

### 報告書のできるまで

全県で 19 本のレポートが提出された。どの実践も子どもの実態を見つめ、学校の特色をいかした実践であった。県集會に提出されたレポートをもとに、研究成果がまとめられた。

助言者	加藤 智 (愛知淑徳大学)	廣瀬 浩司 (岡崎・六ツ美北中)
教育課程研究委員	小木曾正章 (岡崎・六ツ美中)	酒向洋一郎 (一宮・浅井中小)
	佐々木章仁 (豊橋・五並中)	大原 康裕 (名古屋・宮前小)
	北村 健太 (名古屋・はとり中)	渡邊 彰二 (春日井・西尾小)
	赤塚 祐城 (一宮・大和西小)	江崎 漠 (豊田・小原中部小)
	大河内 航 (碧南・中央小)	

## 報告書の要点

SDGsの視点を取り入れた学習内容を扱い、時間・空間認識を育てる探究的な学習の展開を意識した授業をつくることを本研究の目的とした。SDGsの視点で、子どもが世界や日本の諸問題に向き合い具体的な行動を考えるなど、主体的に問題解決していく力を育てていくことを願い、本研究にとりくんだ。

本校の子どもたちは、世界の実情に対して「わたしは恵まれているから」という認識から、「世界に暮らす子どもたちは、わたしと同じ子どもである」という認識に変換する必要がある。また、子どもたちは、世界の課題を日常の学校生活と関連づけながら、多様な人々と協働することで課題に気づき、その解決策を考えていく必要があると考える。

そこで、「さまざまな協働の場面を設定して他者理解を深めたり、探究的な学習展開を取り入れたりすることで、世界の課題をジブンゴトとしてとらえ、向き合うことができる子どもを育てることができる」「持続可能な社会をつくるための土台を広げることで、学校全体の子どもたちの探究的な活動に対する意欲を高めることができる」の2点について仮説をたてた。

本研究で実践したジブンゴトとしてとらえる学習プログラムによって、子どもたちは課題に関心をもつだけでなく、自分たちにできることを意欲的に考えるようになった。そのことから、次年度は、子どもたちが世界の課題に対して、試行錯誤をねばり強く考え続けることのできる力を育てていきたいと考えた。「住み続けられる街づくり」というテーマで、自分たちの住む地域のよさに気付くだけでなく、地域の課題に対して当事者意識をもって深く考え、地域のためにできることをプロジェクトしていくことのできる子どもの育成をめざしていきたい。

### 1 主題設定の理由

#### (1) 社会情勢の側面から

文部科学省では、学校のカリキュラムの基準となる学習指導要領を定めている。2017年3月に公示された学習指導要領の前文に「持続可能な社会の創り手となることが求められている」と明示された。また、中央教育審議会答申に指導内容の示し方の改善として、時間、空間、相互関係などの視点を意識して考察・構想していくといった社会的な見方・考え方の必要性が述べられた。

2019年末から2021年にかけて、新型コロナウイルス COVID-19が世界中で大流行し、わたくしたちの日常生活の自由を奪い、生命・健康そして人間関係を危険にさらした。しかし、経済活動の縮小は、貧困や格差などを拡大したものの、皮肉にも大量生産・大量消費の見直し、在宅勤務の導入や環境整備、温室効果ガスの削減などの副産物を生み出した。社会や人々の暮らしが大きく変革するなか、世界を本格的に持続可能な方向へと転換していくべきときがきているとも言える。

そこで、SDGsの視点を取り入れた学習内容を扱い、時間・空間認識を育てる探究的な学習の展開を意識した授業をつくることを本研究の目的とした。SDGsの視点で、子どもが世界や日本の諸問題に向き合い具体的な行動を考えるなど、主体的に問題解決していく力を育てていくことを願い、本研究にとりくんだ。

#### (2) 第6学年（一昨年度）の子どもたちとの実践から

津島市は、全国におよそ3000社ある津島神社の総本社があり、織田信長ゆかりの地として知られている。また、日本一寺院が多い愛知県の中で「寺密度」が一番高い街である。津島

神社で行われる尾張津島天王まつりや天王川公園で行われる藤まつりが有名で、毎年近隣の市町村からの観光客でにぎわう街でもある。

しかし、一昨年度受けもった第6学年の子どもたちは、歴史と観光でにぎわう街という認識ではなく、「ごみのポイ捨てが多い街」「公園が少ない街」という認識であった。そこで、自分の街に誇りをもてない子どもたちが多かったこともあり、「津島市をPRしよう」というテーマで、津島市の魅力を再発見することを目的に実践を行った。子どもたちは、津島市の歴史や伝統について、地域の観光交流センターの方や、伝統的な菓子をつくり続ける職人の声を聞いたことで、津島市に関心をもち、多くの人に津島市を知ってもらおうと思えるようになった。しかし、子どもたち自身が「未来を切り拓いていく」という認識をもつには至らず、これからも津島市に住み続けたいと考える子どもの数に大きな変化はみられなかった。

そこで、子どもたち自身が未来を切り拓いていく意欲をもたせることのできるような実践を行っていくことを自分自身の使命としてとらえ、実践にあたっていきたいと考えるようになった。

### (3) 第4学年(昨年度)の子どもたちとの実践から

次年度受けもった第4学年では、環境をテーマに「発展途上国のごみ処理の問題」「プラスチックごみの問題」「食品ロスの問題」「環境破壊の問題」「生物の多様性」など、さまざまな環境に関係する問題を取り上げ、実践を行った。国語科や社会科、算数科、図画工作科などの学習と総合的な学習の時間を教科横断的にとらえた学習プログラムを作成し、発展的な学習を展開した。教科学習の中で身につけた知識をもとに視野を広げ、世界の現状と抱える課題を知ることができた。実践を通して、子どもたちは「ビニル袋を使わないようにしなければ海の生き物が死んでしまう」という悲観的な認識から「エコバッグを使えばウミガメをすくうことができる」という、前向きに問題解決をしようとする認識をもつことができるようになった。

また、単元の終末には、子どもたちは「日本ではあたりまえに感じていることを、世界中の人があたりまえに感じられる社会を作っていくためにSDGsがあるのだ」ということに気付くことができた。このことから、持続可能な社会の有効性に気付くことができたという点では成果が得られたと考える。しかし、学習をすすめる中で「日本の現状は恵まれている」という認識にとどまる子どもが少なからずいた。このことから、「世界の課題は身近で起きていないので自分とは関係のないこと」(以下、タニンゴトと記す)と考えるのではなく、「世界の課題は自分の生活や行動などにかかわりがあること」(以下、ジブンゴトと記す)としてとらえることができなければ、解決にむけて前進することもできないという新たな課題が浮き彫りになった。

子どもたちが踏み出せる一歩は小さな一歩かもしれないが、その一歩を踏み出すきっかけとして世界の課題をジブンゴトとしてとらえることが必要であると考え、本年度は、「豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会に参画する子どもの育成」を研究主題として、実践を行った。

## 2 研究の全体構想

### (1) 研究のねらい

本研究は、2030年までに持続可能でよりよい世界をめざすSDGsの理念を、総合学習の中で「学校全体で持続可能な社会に参画する子どもの育成」をめざす研究である。

今年度は、「世界の課題は自分自身の課題ではないのか」という問いをもてる学習展開とすることで、自分も世界の子どもたちの一人であることに気付かせたいと考えている。そのことから、「タニンゴトをジブンゴトとしてとらえる実践を通して」をサブテーマとした。

また、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会に参画する子どもの育成をすすめるために、子どもや教員間のつながりをより強固にしていくことも必要だと考えている。子どもが継続的に学びを広げ、成長していくためには、学校全体で共通理解をはかり、どの学年の子どもにも発達段階に応じた学びを継続していくことも大切だと考える。そこで、子どもに発信をする土台を広げていくためにも、教員研修の場を設けることも手だての一つと位置付け、実践を行った。

## (2) めざす子ども像

### 世界の課題をタニンゴトではなくジブンゴトとしてとらえることのできる子ども

世界の実情に対して「わたしは恵まれているから」という認識から、「世界に暮らす子どもたちは、わたしと同じ子どもである」という認識に変換する必要がある。それはわたくしが考えるジブンゴトともつながる、「わたしも世界の一人」という当事者意識をもたせることそのものである。

### 多様な人々と協働して課題を探究できる子ども

世界の課題を日常の学校生活と関連させるとともに、多様な人々と協働することで課題に気づき、その解決策を考えていける子どもたちへと成長していける実践にあたっていきたいと考えている。

## (3) 研究の仮説

### 仮説①

さまざまな協働の場面を設定して他者理解を深めたり、探究的な学習展開を取り入れたりすることで、世界の課題をジブンゴトとしてとらえ、向き合うことができる子どもを育むことができるであろう。

#### 仮説①を支える手だて

- ア ゲストティーチャーの活用
- イ 級友と考えを交わし合う場の設定
- ウ 参加型の学習方法\*を取り入れた学習プログラムによる探究的な活動

### 仮説②

持続可能な社会をつくるための土台を広げることで、学校全体の子どもたちの探究的な活動に対する意欲を高めることができるであろう。

#### 仮説②を支える手だて

- エ 教員研修の場の設定
- オ 教科横断的なカリキュラムの作成

### ※参加型の学習方法について

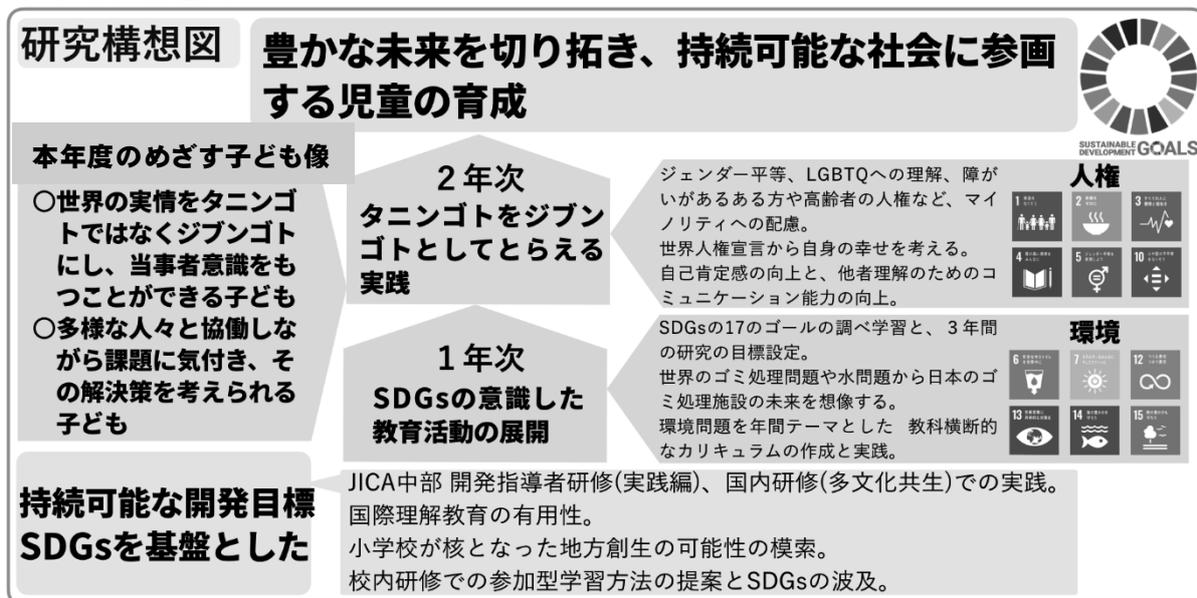
近藤(2019)は、「持続可能な開発の理念を反映する教育方法の検討\*」の論中に、『単に知識の伝達にとどまらず、体験・体感を重視して、探求や実践を重視する参加型アプローチをすることが大切』であること、さらに、『自発的な行動を引き出す「ファシリテート」の働きを重視することも大切』であると述べている。本実践では、学習者の参加する態度や問題解決

するための能力を学び実践するためには、参加型学習方法を取り入れた探究課題を用いることが効果的であると考えられる。

参加型学習方法は、わたくしが JICA 中部主催の開発教育指導者研修（実践編）と教員国内研修（多文化共生）で体験したもので、学習者一人ひとりの経験や知識、意見を尊重し、それらを引き出していくことで、対話的に相互の学びを生み出していく学習方法である。

引用) 近藤牧子. 立正大学教職教育センター年報 第1号 2019 (令和元) 年度掲載論文

#### (4) 研究構想図



### 3 授業実践

本校5年生は、総合学習のテーマを人権にしぼって行うことになっている。そのため、ジブンゴトとしてとらえていくための準備として身近で起こっていることを問題として提起するところから始めることにした。

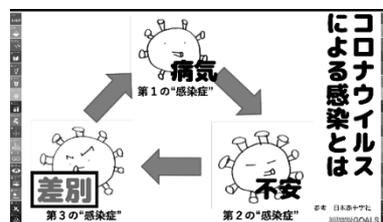
#### 準備実践① コロナウイルス感染症の3つの感染\*

「病気」「不安」「差別」の3つの感染があることから、コロナウイルス感染症によって差別を受けてしまっている人がいることについて、日本赤十字社の資料\*を使い学習をした。

【資料1】コロナウイルス感染症の感染対策だけでなく、「差別」の感染に加担していかないようにするために、〔行動宣言〕を作成するアクティビティを行い、自分にできる行動を共有する場を設けた。「お母さんが病院で働いていて同じことを言っていたから、自分がそうしないようにしたい」という宣言を発表した子どもがおり、友だちに打ち明けにくいことを積極的に発表したことで、学習の深まりを感じる場面を見ることができた。

この実践でジブンゴトとして感染症対策を行っていくことの重要性と、思い込みによって差別・偏見となってしまう難しさを示すことができた。そこで、これから学んでいく人権という言葉の意味を明確に示すために、世界人権宣言について紹介することにした。

引用) 日本赤十字社. “新型コロナウイルスの3つの顔を知ろう！～負のスパイラルを断ちきるために～”. 国内災害救護に. [https://www.jrc.or.jp/saigai/news/200326\\_006124.html](https://www.jrc.or.jp/saigai/news/200326_006124.html) (2021-11-1)



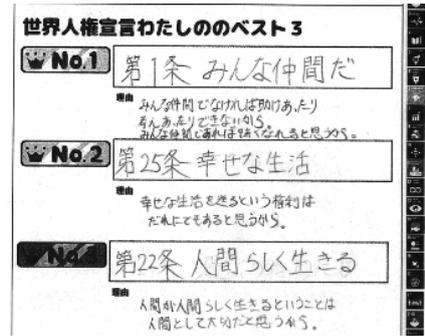
【資料1】日本赤十字社の資料

## 準備実践② 世界人権宣言について知る

アムネスティインターナショナル日本の「世界人権宣言（谷川俊太郎訳）」を使い、世界人権宣言への理解をすすめるために、[ランキング] というアクティビティを使った。世界人権宣言の31条の条文から、自分にとって大切だと思うものをベスト3のランク付けをして書き出した

【資料2】。その後、ギャラリー方式という共有方法で自分と同じベスト3を探した。この学習によって、人それぞれに大切だと思った宣言が違っていることから、人との違いを受け入れ、人との違いに関心をもつことの重要性を学ぶことができた。また、「わたしたちの『幸せ』を見つけよう」という学年のテーマを示したことで、自分の人権や他者の人権を守っていくことが、「わたしたちの『幸せ』を見つけていく」ことにつながるという意識をもつことができた。

引用) アムネスティインターナショナル日本. “世界人権宣言（谷川俊太郎訳）”. 世界人権宣言. <https://www.amnesty.or.jp/lp/udhr/> (2021-11-1)



【資料2】世界人権宣言ベスト3

## 本実践① あたりまえはあたりまえ？

ルワンダ村落部の少年の一日\*について、[対比表] というアクティビティを使って、わたくしたちの生活との違いについて考えた。さらに、あってもいい違いとあってはいけない違いを考えることで、ルワンダが抱えている問題について迫った。その後、タブレットを使い、16の商品の中からアフリカとつながりがあると思うものを選ぶワークショップを行った。画面共有をすることで、自分と違う考えをもっている友だちと意見交換をすることができた。遠くに暮らす人たちと自分の生活が、知らないところでつながりあっていることに気付き、他国への関心を深めることができた【資料3】。

特に、10Lの水運び体験を行ったことで、子どもたちが水の問題に対して改善を期待する感想が多く出た【資料4】。しかし、今回の体験によって得られた感想はどれもタニンゴトであり、自身の行動によって解決できる手だてが見つけられない子どもばかりであった。そこで、実際に海外で支援活動を行った経験のある方に出会わせることで、世界の課題を身近に考えさせることができるような手だてを講じることにした。

引用) JICA 地球ひろば. “ルワンダ村落部の少年の一日”. 授業で使えるショート映像集. [https://www.jica.go.jp/hiroba/program/practice/education/video/photo/photo\\_01.html](https://www.jica.go.jp/hiroba/program/practice/education/video/photo/photo_01.html) (2021-11-1)

特に、10Lの水運び体験を行ったことで、子どもたちが水の問題に対して改善を期待する感想が多く出た【資料4】。しかし、今回の体験によって得られた感想はどれもタニンゴトであり、自身の行動によって解決できる手だてが見つけられない子どもばかりであった。そこで、実際に海外で支援活動を行った経験のある方に出会わせることで、世界の課題を身近に考えさせることができるような手だてを講じることにした。

引用) JICA 地球ひろば. “ルワンダ村落部の少年の一日”. 授業で使えるショート映像集. [https://www.jica.go.jp/hiroba/program/practice/education/video/photo/photo\\_01.html](https://www.jica.go.jp/hiroba/program/practice/education/video/photo/photo_01.html) (2021-11-1)

引用) JICA 地球ひろば. “ルワンダ村落部の少年の一日”. 授業で使えるショート映像集. [https://www.jica.go.jp/hiroba/program/practice/education/video/photo/photo\\_01.html](https://www.jica.go.jp/hiroba/program/practice/education/video/photo/photo_01.html) (2021-11-1)

引用) JICA 地球ひろば. “ルワンダ村落部の少年の一日”. 授業で使えるショート映像集. [https://www.jica.go.jp/hiroba/program/practice/education/video/photo/photo\\_01.html](https://www.jica.go.jp/hiroba/program/practice/education/video/photo/photo_01.html) (2021-11-1)

## 本実践② JICA 中部出前授業「トンガ王国とSDGs」

トンガ王国の協力隊員であった JICA 中部職員に協力を依頼し、トンガ出身のラグビー選手2名と日本でのラグビー選手1名を招待し、スポーツと国際理解と SDGs の関係について授業をしていただいた。自然豊かなトンガが抱える「ゴール7：エネルギーをみんなにそしてクリーンに」の問題についての話や、「目標をもってとりくむことの楽しさ」の話聞かせ

### 「アフリカとのつながり」の感想

- ・伊勢海老がアフリカと関係していることがびっくりした。
- ・全部がアフリカと関係していることを知って、おどろいた。
- ・私たちが生活するときに必要なものばかりでびっくりした。
- ・アフリカからもらっているものがたくさんあるから大切に使うていかなければならない。

### 【資料3】「アフリカとのつながり」の感想

### 「あたりまえはあたりまえ？」の感想

- ・日本は蛇口をひねったら水が出るのに、毎日重い水をもって20分も歩くのは大変だから、早く水道をつくってほしい。
- ・毎日頭に重い水を持たないといけないなんてとてもつらいだろうと思いました。
- ・毎日水を持たなければならぬなんて納得できない。

### 【資料4】「あたりまえはあたりまえ？」の感想

ていただいた。さらに、プロ選手によるラグビー体験も行っていただき、世界の人たちとのつながりを感じることのできる出前授業となった。

多くの子どもが JICA の支援活動に関心をもったように【資料 5】、自分が行っている SDGs アクションを続けていきたいと意欲的に述べる子どももいた。世界の問題をより身近に感じることができた子どもばかりで、子どもたちの学びが着実に深まっている実感はあった。しかし、「トンガに対する関心が高まった」「がんばってほしい」「勉強になりました」【資料 6】という感想にとどまり、ジブンゴトとして行動に移す段階にはならなかった。そこで、トンガのラグビー選手が話してくれた「今後の展望や夢」「幸せを感じる時」という実際に聞いたことを題材にして次の実践を行うことにした。

自分の気持ち	理由
すごい	JICAの活動で150か国を回り回すなんてすごいと思ったから。
がんばりたい	JICAの人たちもSDGsに取り組んでいるから、私も同じように頑張りたいなという気持ちがある。
もっと知りたい	トンガの国の生活や、JICAの人の活動をもっと知りたいなと思う。

【資料 5】出前授業の振り返り①

②今日、勉強になったことを教えてください。  
 日本で当たり前なのが外国では当たり前じゃない国な  
 んがたくさんあるということ、世界中にJICA海外活動  
 家が広がって運動が勉強を多々しているということが  
 勉強になりました。

【資料 6】出前授業の振り返り②

### 本実践③ 「わたしたちの幸せって何だろう」

本校の子どもの考える幸せについて類型化するために、〔カード式整理法〕というアクティビティを使った。その後、類型化された「自分たちが幸せに感じている項目」と、「ルワンダの人々やトンガの人々にとっての幸せ」を比較するために、〔対比表〕を使った学習を行った。わたくしたちにとっての欠かすことのできない幸せと、ルワンダやトンガに暮らす人たちのとの幸せは、類似していることに気付かせることで、同じ地球に暮らす人間であることに気付かせることができた。また、最後に〔指標づくり〕というアクティビティを使い、「わたしの幸せ3か条」を作成させ、自分だけでなく世界に暮らす同じ人を思いながら考えさせることができた【資料 7】。

①地球があること	④学校に行けたとき
②生まれてきたこと	⑤戦争がなくて平和なとき
③家族がいること	⑥SDGsが達成された時

【資料 7】わたしの幸せ3か条

今回の実践によって、トンガやルワンダに住む人も同じ地球に暮らす人間であることに気付けたことで、世界の課題について学んでいくことの意味を考えさせることができた。また、自分ができることを行っていく意欲につながることもできた。そこで、身近なことに興味をもっていくことの必要性をより体験させるために、次の実践を行うことにした。

### 本実践④ 「わたしとあなたの違い」で他己紹介

他者への関心を深めることが他者理解の第一歩であることを学ぶとともに、コミュニケーションスキルを養うことが良好な関係を築くことができることに気付かせるための学習を行った。まずは、自分の好きなものや好きなことを、〔分配円〕というアクティビティを使って、項目ごとに割合を示しながら記入した。その後、成果物を交換し、インタビューしないというルールのもと、好きな理由を予想しながら他己紹介の台本作りをした。「きっとこうだろう」という他己紹介と、「本当はこうなんだよ」の答え合わせの自己紹介によって、「もっと知りたい」という思いと「もっと知ってほしい」という思いをもつことができた。この実践によって、他者との距離を縮め、相互理解をはかることができた。

この実践によって、世界の人々と結びついていくために「わたしとあなた」というつながりを深めることが、班員とのつながりや学級とのつながり、学年とのつながりといったような、コミュニティを広げることに気付かせることができた。この成果は、少しずつコミュニティを広げていった先にある世界とのつながりを考えさせるきっかけになり、世界の課題解

決の第一歩とすることができると考える。

次の実践では、1か月後の学校行事をテーマに設定し、実生活で起こりうるシーンを切り取ることで、他者理解の重要性を考えるとともに、多様な課題をジブンゴトとして考えやすくなるような学習を行うことにした。

### 本実践⑤ わたしたちの自然教室

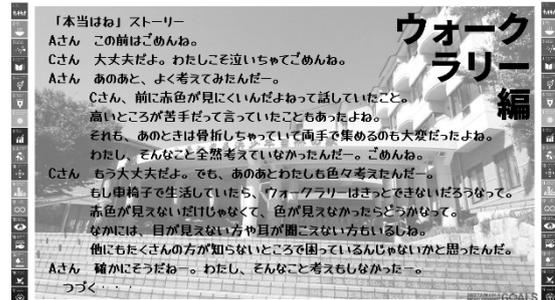
11月に行う自然教室が、本学年91名にとって「誰一人置き去りにしない」学年行事にできるように、さまざまな場面で考えうるマイノリティへの配慮を考える学習を行った。「ウォークラリー編」「キャンプファイヤー編」「夕食バイキング編」「夜のお楽しみ会編」の4場面を切り取り、台本の通りに演じさせた。その後、それぞれの台本に書かれたセリフから、マイノリティへの配慮がたりなかったという場面を探すために、[ブレインストーミング]と[対比表]によって、問題点と解決策を考えさせた。障がいのある方々の人権や多文化共生の認識、ジェンダー平等やLGBTQへの理解を促すことで、誰一人置き去りにしない社会をめざすうえでマイノリティへの配慮の重要性を考えさせることができた【資料8】。最後に配慮がたりなかった場面を自分たちで台本を書き換えて[ロールプレイ]を行った【資料9】。業後の振り返りの中では、特に「ウォークラリー編：障がいのある方に対する配慮」で

子どもたちの変容を見ることができた。ふりかえりには、実践④で学んだ他者理解の重要性を書く子どもや、障がいのある方と私たちは変わらないのだという共生社会の必要性を書く子どももいた【資料10】。多くの子どもが、多様な事情や考えをもつ他者と共存していくために、他者と積極的にかかわっていくことが大切であることに気づくことができた。

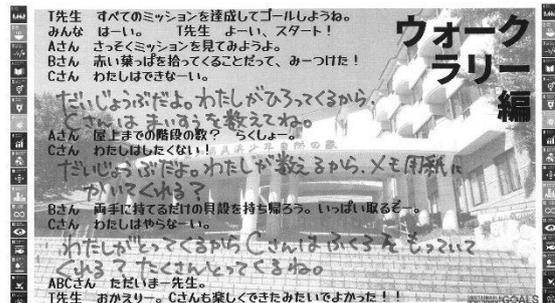
本実践は、実際に起こりうるかもしれない状況を想定した実践であったため、ジブンゴトとして考えやすい学習になった。【資料10】のような感想をもつようになったことは、子どもたちがジブンゴトとしてとらえることができたことによる成果であると考えられる。子どもたちがこの学習で学んだことをいかして、家族や学校、地域の人たちとともに、持続可能な社会をつくっていく一人になることを願って、今後も実践を続けていきたいと考えている。

## 4 教員研修の実践

SDGsと参加型学習方法の紹介を目的に学習会【資料12】を設けた。本学習をすすめていく上で必要なさまざまな情報を共有するとともに、参加型の学習方法を授業に組み込んだ学習プログラムを構築していくことができるように、教員研修を定期



【資料8】 支援を考える資料



【資料9】 新しい台本

### 「ウォークラリー編」の感想

- ・「本当は…」のストーリーを聞くと、人のことを知ることは大事なんだと思いました。
- ・世界にはいろいろな人がいることを知りました。私も松葉杖を使っていたことがあるので、恥ずかしいことではないことを知りました。
- ・体に障害がある人も同じ人間で、人と寄り添いながら生きていたと思いました。

【資料10】 「ウォークラリー編」の感想

### 学習会の実践(一部)

- ① SDGs アクティビティの紹介  
テーマ「SDGsについての説明とアクティビティの体験会」
- ② [カード式整理法]の体験  
テーマ「わたくしたちが幸せを感じる瞬間は」
- ③ [ランキング法(みんなのベスト3)]  
テーマ「これが大切、世界人権宣言」
- ④ [対比表]  
テーマ「あつていい違いとあつてはいけない違い」

【資料12】 実践内容

的に行った。

本実践に賛同した職員が、さまざまな学習を構築し、実践した。一部を紹介する。

**(1) 1年生の実践「SDGs ってなーに? (特活)」**

クイズを通して、SDGsについて肯定的に出合う実践を行った。SDGsの「ロゴが何個あるか?」や「何色に分かれているか?」や「SDGsを何と読むか?」などの簡単なクイズや「みんなが何歳になるまでの目標?」や「誰の目標?」などのクイズを通してSDGsについて知ってもらう活動を行った。誰でも正解できるクイズにしたことによりSDGsに肯定的に出合う姿がみられた。また、SDGs推進大使の動画や国連が配信している子ども向けの動画などを活用することで、より肯定的に出合うことができるように工夫した。さらに低学年の子どもでも伝わりやすい動画教材を活用することで、貧困や飢餓などの言葉やイメージを伝えることができた。

**(2) 2年生の実践「世界の子どもは、今、何してる? (生活科)」**

絵本の読み聞かせによって、多様性について考える学習を行った。「ブルキナファソ」の生活事情が紹介されている絵本では、子どもたちのくらしや学校について考えることができた。その後、ブルキナファソの生活の実情や環境について似ているところと違うところを[対比表]で考えさせた。事後の振り返りでは、「困っている人を助けてあげたいけれど、遠くだから助けられない」「きれいな水やごはんを届けてあげることができないかと思いました」と自分たちにできることはないか考える意見が出た。

**(3) 3年生の実践「ルワンダ村落部の少年の一日」**

5年生で行った実践を3年生用に言語の支援を増やして実践を行った。その後、世界に関心を寄せ始めた3年生に、もっと肯定的に他の国の文化に触れさせたいと考え、東京オリンピックが開催されるこの機会をいかして、世界の国のよさに焦点をあてさせたいと考えた。そこで、オリンピックの応援サイト※を利用していろいろな国を知る活動を行った。このサイトには、その国の応援エールと国のよさが動画で紹介されているので、いろいろな国に興味をもって調べることで、よさに気付かせることができた。

今後は、自分たちが興味をもった国のSDGsの課題について調べ、その課題と自分たちの生活のかかわりを話し合ったり、自分たちにできることを探したりしていく予定である。

※ NHK for school. “世界を応援しよう”. <https://www.nhk.or.jp/school/cheer/>  
(2021-11-1)

**(4) 4年生の実践「人と環境」**

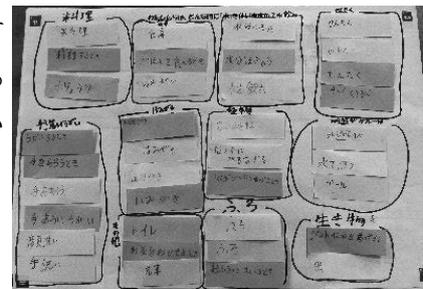
昨年度作成した教科横断型のカリキュラム【資料13】にそって実践をしている4年生は、昨年度の反省点をいかしながら、カリキュラムの改善をすすめている。

4年生	4月	5月	6月	7月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
国語					新聞をつくらう						
算数								電球とその計算 小鏡のかけ算 わり算			
理科		天気と気温									
社会		ごみのしめつと 利用	水とくらしを 考える水	自然災害から 人々を守る活動			水いぢのはって んにくした 人々				
総合	SDGsとは	100年後の未来 の天気予報	海洋プラスチック の問題	ルワンダと水の 問題	環境学習づくり の準備	カダワラ・リア イのル・オー スナウ	地球で起る事 象	炭素ロスの脱離 づくり	災害に強いまち づくり	生物の多様性	1年間のまとめ

【資料13】 4年生の教科横断型カリキュラム

また、「くらしをささえる水」の単元では、参加型の学習方法を取り入れており、「どんなときに水を使うか?」について[カード式整理法]というアクティビティを行うなど、多くの実践を行っている【資料14】。浄水場の映像を見たり、ろ過の実験を実際に行った

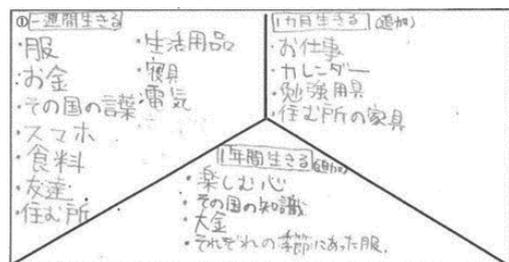
りするなどの教科横断的な活動を通して、水をきれいにす  
 するためには多くの工夫が必要であり、安全・安心な水があ  
 るということはあたりまえではないということ気付いた。  
 単元のまとめとして、学んだことを新聞形式に表し、  
 友だちと読み合ったことで、水の大切さをより強く感じる  
 ことができた。



**(5) 6年生の実践「難民問題」**

**【資料14】 成果物**

修学旅行で自国について知る→外国と肯定的に出会う→問題について知るという流れで  
 学習を組み立ててきた。ジブンゴトとして考えたり、自身の考えを整理したりするために  
 アクティビティや思考ツールを取り入れた。[難民のカバン] というシミュレーションゲー  
 ムを通して必要な持ち出し道具を考えました。その  
 後、難民の避難場所や避難後の生活、日本の難民  
 受け入れ状況などについて学習した。[思考ツ  
 ール: Yチャート] を活用し、「1週間生きる」「1  
 か月生きる」「1年間生きる」と避難所で生活  
 するのに何が必要かを考えた【資料15】。それぞ  
 れの期間を見て真剣に考え、期間ごとに必要な  
 ものが違うことに気付くことができた。期間を指定して考えたことで、「難民の状況がいつ  
 まで続くか分からない」という不安と隣合わせであることを実感することができた。



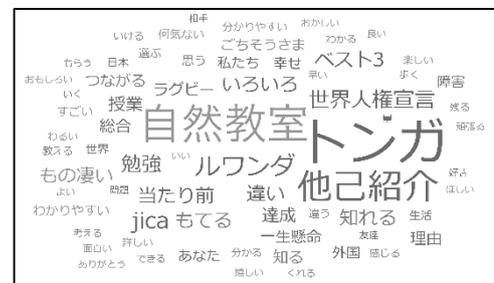
**【資料15】 避難所生活のYチャート**

**(6) 特別支援学級（なかよし学級合同）での実践**

特別支援学級では、子どもの実態に合わせた、2つの「SDGs 学習」教材を考えました。初め  
 に「SDGs のアイコン絵合わせカード」を使ったゲームを行った。ゲームを通した「SDGs 学  
 習」により、抵抗なく、興味をもってとりくむことができた。2つ目は「世界の困ったこ  
 とカード」を使ったゲームを行った。交流学級で「SDGs 学習」に参加している子どもも多  
 いため、「17 の目標」を理解しやすくするために考案した。それぞれの目標の説明を「こ  
 んな困ったことがあるよ」の視点の簡単な言葉に置き換えたことで、身近な問題として感  
 じることができた。そのため、給食の時間には、教室掲示をしてあるカードをさしながら、  
 「残すのは、もったいない」とつぶやく子どもも出てきた。子どもの実態に合わせた教材  
 を工夫することで、意欲的に学習にのぞむことができた。

**6 実証・考察**

人権をテーマに学習してきた 10 月までの学習の  
 振り返りを行いつつ、「津島市の未来のために役立つ  
 学習であったか」というテーマでアンケートを行い、  
 子どもが関心を寄せている学習を、ワードクラウド  
 【資料16】を利用して整理した。テーマの出現頻度  
 をもとに考察を行っていく。



**【資料16】 未来のために役立つ学習**

**(1) 「トンガ」について**

スポーツと国際理解と SDGs の関連を体験しながら学ぶことができた経験により、多く  
 の子どもが関心をもっていることが分かった。このことから、紙面や動画教材を題材にし  
 た学習に比べて、実際に国際問題に貢献している方の話をもとに行った学習は効果が高い

ことがわかる。また、事後学習で、国際協力を仕事にしている方への関心をもつ子どももおり、JICA 海外協力隊に興味をもち自発的に調べ学習を行う子どもまでいた。今後は、在籍する学校が実践したマラウイ共和国のンサナマプライマリースクールとのオンライン国際交流授業の経験をいかし、体験的に学習にのぞめる場を提供していくことが大切と考える。また、一度という経験で終わるのではなく、定期的に学習内容の交流を行う場をつくることで、新たな気付きや学びの深まりをはかることができるのではないかと考える。

## (2) 「自然教室」について

今後の学年行事である自然教室の事前学習において、マイノリティへの配慮を具体的に考えることで、「誰一人置き去りにしない」という SDGs の理念を理解するとともに、自分たちにできることはないかと考えることができたようである。とくに、ウォークラリーでおこなうミッションは選択制にすることで、グループの特性に合わせたミッションを選ぶことができるように提案する意見が生まれ、学習の深まりを感じることができた。今後は、マイノリティへの配慮を具現化していくために、配慮の方法や支援のあり方を福祉実践教室での学習を絡めて学習にのぞませることで、さらなる学習の深まりをめざしていきたいと考えている。

## (3) 「他己紹介」について

身近なコミュニティに関心をもつことができた子どもが多くいることがわかった。共生社会を築いていくためには、身近なコミュニティに関心をもち、少しずつ広げていく必要があると考えている。共同体感覚を養うことができたことで、多様性の尊重というキーワードに迫っていくことができる可能性を感じた。多様性を尊重できる子どもを育成し、共生社会を創造することのできる子どもの育成をめざしていくためにも、実践として行った他己紹介を今後も活用していきたい。

## (4) 教員研修について

定期的に行った学習会を行う前後でアンケート【資料 17】を行った。1 回目の学習会でを行ったアンケートには「学習活動の中でどのように SDGs を取り入れたらいいのか分からない」という意見や、

「参加型の学習方法をどの場面でとりくめばいいのかがわからない」という意見が多かった。それが、半年後に行ったアンケートには、【資料 17】のような感想をもらうことができた。今後も子どもに発信をする土台を広げるために、教員研修を続けていきたい。

### 学習会のアンケート(事前□→事後○)

- 世界の課題を低学年の児童に考えさせるのは難しい。  
→○ 項目をしぼって対比表を行うことで、低学年の子どもでも考えやすい内容に変えられることがわかった。
- 日本が幸せ、日本が優れているという感覚になりそう。  
→○ 自分の身の回りの問題から解決させていけるような学習にすることで、子どもたちにジブンゴトとして考えさせることができると思う。

### 【資料 17】教員の変容

## 7 まとめ

ジブンゴトとしてとらえる学習プログラムによって、子どもたちは課題に関心をもつだけでなく、自分たちにできることを意欲的に考えるようになった。そのことから、次年度は、子どもたちが世界の課題に対して、試行錯誤をねばり強く考え続けることのできる力を育んでいきたいと考えた。「住み続けられる街づくり」というテーマで、自分たちの住む地域のよさに気付くだけでなく、地域の課題に対して当事者意識をもって深く考え、地域のためにできることをプロジェクトしていくことのできる子どもの育成をめざしていきたい。豊かな未来を実現するためにも、わたくし自身が一步をふみ出すことで、子どもたちに勇気を与えていければと思う。